

中観派における他生否定の歴史的展開

——カマラシーラによる転換点——

吉 水 千 鶴 子

『中論』(MMK)の注釈者たちは、第1章第1偈の四句不生と第3偈¹⁾にもとづき、「他からの生起(他生)」の否定を論じる。第1偈の注釈では①「他であること(paratva, gzhan nyid)」を前提とした帰謬論証または推論式によって、第3偈の注釈では②「原因に結果の自性は存在しないこと」③異時である因果には相互に「他であることは成立しないこと」の二つを論拠とする(ブッダパーリタ [以下 B], チャンドラキールティ [以下 C] は①を帰謬の前提とするのみだが、パーヴィヴェカ [以下 Bh] は世俗として①「他であること」を認めて論証因に用い、それと矛盾する③は用いない)。「他生の否定」が中観派にとってその長い歴史を通していかに重要な課題であったかは言うまでもない。自からの生起、自他からの生起、無因からの生起を認める仏教徒はいない。しかし、有部、経量部、瑜伽行派など中観派以外の仏教諸学派は四縁に代表される異なる存在間の因果関係を認めていたので、『中論』注釈者たちはこれと対峙せねばならなかった。さらにダルマキールティ(以下 Dh)以降の中観派は、因果関係の確立手段である認識根拠(pramāṇa)は何か、という非仏教徒に対する議論を見据えながら、『中論』の勝義不生の学説を擁護するために、他生否定の認識根拠の確立に腐心する。その議論はパツァプ・ニマタクなど12世紀以降のチベットの『中論』注釈者たちにも継承され、因果関係について諸学説の批判的考察を含む議論にまで発展した。こうした他生否定の論拠とその歴史的展開について筆者は全体を詳述した論稿を発表予定であるが²⁾、この議論が『中論』注釈の範囲を越えて新たな展開を見せてくる転換点はカマラシーラ(8世紀, 以下 K)の『中観光明論』(MĀ)に鮮明である。本稿では彼が示す思想史上新たな問題意識を明らかにする。それにより後代の展開への繋がりも見えてくるであろう。

他生を認める前主張

Kの『中観光明論』は師シャーントラクシタ(以下Ś)の『中観莊嚴論』(MAI)と同様、中観派の無自性の教説を証明することを目的とする。Kは、Śが提示した離一多性論証(ekānekaviyogahetu)を継承し、一切法無自性は經典(āgama)、論理(yukti)のいずれによっても証明できない、という前主張を論駁していく。その論理に『中論』が示した四句不生の教説と注釈者たちによる論証も含まれる³⁾。前主張者は述べる。

[四句不生の論理は正しくない。] なんとすれば、自からも[自他]両方からも既に滅した因からも無因からも常住な因と主張されるものからも結果は生起しない、というこのことは正しいとしても、無常と認められまだ滅していない他なる因(rgyu gzhan mi rtag par 'dod pa ma zhig pa)から結果が生起することについていかなる矛盾があるろうか、[あるとすれば](go 'gal ba ci zhig yod na)それによってそこから結果が生起することも否定されようが、これに対しては排斥する認識根拠(gnod pa byed pa'i tshad ma, *bādhakapramāṇa)は些かも無いのである(D137a4-6, P147b5-7)。

生起の原因が無常にして滅していない他に限定されているのは、前主張者も仏教徒であることを示唆する。「排斥する認識根拠」として[1]上述の③「他であることは成立しないこと」は無効とされる。結果が生じる以前に因は果に対して「他」ではないが「他」といわれる存在一般(dngos po tsam, *vastumātra)は認められるべきであるからである(D137a6f., P147b7f.)。[2]①「他であること」は不定(manges pa, *anaikāntika)因とされる。他であるが故に不生なのではない。能力が欠けているという別の不生の要因があるからである(D137a7-137b1, P147b8-148a1)。また「他であること」は中観派にとって不成立だからである(D137b5, P148a7)。さらに[3]「まだ滅していない間断のない他から結果が生起すれば因果同時になってしまう」という排斥も刹那滅の因果には妥当しない(D137b1-5, P148a1-5)。さらに前主張者は[4]存在していない結果が他なるものから生起することに矛盾はないとして②「原因に結果の自性は存在しないこと」は排斥根拠にならず、①を前提としたBとCの帰謬論証「もし他から生起するならば、すべてからすべてが生じることになろう(sarvataḥ sarvasambhavadprasāṅgāt)」(PsP I: 192, 7, cf. MA VI.14 [PsP I: 192, 1-4])も無効とする。原因の能力は個々別々だからである(D137b7-138a1, P148b2-4)。

これらの前主張のうち、[4]の帰謬論証への批判はCの『入中論』とその自注にも現れる(MABh 90, 10-91, 11 ad MA VI.15)。彼は①「他であること」をすべての因

に共通する前提として上記の誤謬を導き (MABh 91, 12-92, 10 ad MA VI.16), 次に因果間に③「他であることは実は存在しない」として前主張を論駁する. しかし, この③の論拠を裏づけるため, あくまで他であることは異時の因果間には成立しないと主張する (MABh 92, 11-98, 19 ad MA VI.17-20). K は [3] の後主張で, 刹那滅し連続する因果の異時も否定するので, この点では C の議論と噛み合わない. さらに [2] は Bh の推論式への批判であるが, 類似の批判をアヴァローキタヴァ (7世紀後半, 以下 Av) の『般若灯論釈』(PPT) の前主張と C の『明句論』(PsP) に見いだすことができる (後述). ここからは, K が C の他生否定の議論を踏まえながらもそれを修正し⁴⁾, Bh 擁護を試みている, と推測できる. ただ, K の主眼は刹那滅する因果モデルの否定にあった. そのため, 彼自身が新たな推論式を作り「排斥する認識根拠」を示した (後述). 『中論』注釈者たちの前主張は第2偈に説かれるアピダルマの四縁の説であったが⁵⁾, K は, 中観派が対峙するのは中観派以外のほとんどが認める実在間の因果モデルであること, 問われるべきはそれを否定する手段としての認識根拠 (pramāṇa) の妥当性であること, を明確にし, 『中論』注釈の伝統を越えて時代に即した議論を展開したのである.

他生否定の論理

K は上記に引用した前主張「無常にしてまだ滅していない他なる因からの生起」を検証する. その前に前主張者も認めない常住な原因からの生起を「常住なものは順次にも同時にも効果的作用の能力がない」という Dh の刹那滅論証における論証因である「存在性」(sattva) の定義を用いて否定する (D192a6-193b2, P210b7-212a7). さらに無常な原因を現在に限定して前主張者が支持する間断なく連続する刹那滅の因果モデルを否定する⁶⁾ (D195a4-197a4, P214a6-216b5). 二刹那の因果異時を排斥する推論式は次のようである.

全体として (thams cad kyis, *sarvātmanā) 別の時 (=刹那) による間断がない [二つの] ものに前後の時間はない. たとえば左右の角のように [それらは同時である]. 因果もまた全体として別の時による間断はない. [この論証因は] 自性因 (rang bzhin gyi gtan tshigs, *svabhāvahetu) である (D196a4f., P215b2f.).

二刹那が間断なく連続する場合それらは同時になってしまうという誤謬が導かれる. さらに二刹那の因果が「全体として」ではなく「部分的に」連続する場合も否定される. その場合刹那が部分をもち分割可能になるという誤謬に陥るから

である (D196a5f., P215b3-5). これらの論理は K 自身が示唆するように、原子批判の論理の応用である。『中観莊嚴論』で Ś がそれを用い (MAI 11-13)、ヴァスバンドゥ (4世紀) の『唯識二十論』で提示された古典的な論理と言えよう (Viṃśikā 12). 「一つの原子がその全体で間断なく他の原子と結合するならばその集積は一原子と同じ大きさとなり、部分的に結合するならば原子は部分をもつことになる」という空間的な拡張への批判を時間の連続に適用したのである。いずれも最小単位の実体を想定することの誤謬である。

先行する中観派の他生否定の検証

このように前主張を排斥した後、K は「我々にとって存在・非存在などのこの一切は勝義として成立しない」と中観派の立場を述べ、先行する中観派の他生否定の論拠を検証する。そこで「天秤の (左右の) 上がり降り (tulādaṇḍonnāmāvanāma) のように種が減すると同時に芽が生じる」(cf. PsPL 569, 1-9における引用) という『稲竿經』(Śālistambasūtra) の説を間断のない刹那滅の因果の教証とする解釈を否定し、これは断見を排除するための教えだとする (D196a5f., P215b3-5). 同じ教説は C によって因果の刹那同時を是とする前主張の教証として用いられ、彼は因果は異時だとして、因果間の③他であることの不成立を主張する (MABh 97, 1-7). しかし K は異時の因果関係も否定する。では他であることの不成立という『中論』第1章第3偈にもとづく③の論拠を K はどう扱うのか。彼は、これは「他」という語が示す実体を承認する外道 (mu stegs can, *tīrthika) の説を論駁する目的で説かれた、と述べる⁷⁾。彼は第1偈の注釈で Bh が提示した①「他であること」を論拠とした推論式を擁護し、世俗として「他であること」を容認する。

従って、ある師が「勝義において内処は他なる諸縁より生起しない。[内処は諸縁とは] 他であるから。[壺の如し]⁸⁾ 云々と述べたその論証因も否定的遍充 (ldog pa, *vyāyireka) に疑いがあるものではない。なぜならば異類 (mi thun pa'i phyogs, *vipakṣa) には説かれた通りの排斥する認識根拠 (gnod pa can gyi tshad ma, *bādhakapramāṇa) が存在するからである。存在するものの無常の証明と同様である⁹⁾。愚かさ (blun pa nyid) などについて証明する際には他であることが異類 [にあること] を排斥する認識根拠は少しも無いので、それについてこの [論証因] は不定 (ma nges pa, *anaikāntika) となるが、生起の否定という所証 (sgrub [emend.: bsgrub] par bya ba, *sādhyā) についての異類に [論証因があることを] 排斥する認識根拠はある [ので、それに] について [不定] ではない。言説として他であることのみは成立するので、論証因は不成立 (ma grub pa, *asiddha) でもない。論証因などは、真の実在について言語表現されるものとしては (yang dag pa'i dngos por gyur pas tha snyad

gdags par) いかなる場合にも成立しないとすでに述べた。それ故、ある者がこの〔論証〕について不定だ、不成立だと述べたことは何であれ決して妥当しないのである (D198a6–198b3, P218a4–8)。

「ある師」すなわち Bh の推論式に論難を加えた「ある者」とは、Av がその名を挙げて反論しているスティラマティ (以下 S) であろうか。ただ、S の『大乘中観釈論』には論証因の不成立と不定への言及はなく、それは Av の反論のみにおいて論じられる。一方、C も当該の推論式を含む複数の Bh の推論式を引き、論証因の不成立と不定を両方指摘している¹⁰⁾。K は異類あるいは所証と反対の (sādhavyaparyaya) 属性「生起」をもつものに論証因が存在することを排斥する認識根拠は明示しない。「生起するものは (原因とは) 他ではない」という否定的遍充を想定するならば、C らの帰謬論証「他から生起するならば、すべてからすべてが生じることになろう」がその役割を果たすことはあり得るだろう。

K の後主張は、まず「刹那滅する他なる因からの生起」を詳細に吟味して否定し、それから中観派の勝義不生の立場を確認し、さらに『中論』注釈者たちが立てた論証を検証し解釈する、という構成である。前半で自らの推論式を示し、原子批判の論理も応用しながら刹那滅する存在あるいは自性 (bhāva, svabhāva) の間に因果は成立しないことを広く論じた。この問題意識はチベットに継承され、帰謬派であるパツァブはその『中論』注釈 (*dBu ma rtsa ba'i shes rab kyi ti ka*) で、非仏教徒の因果確定の認識根拠の否定までを含んだ網羅的な考察を展開する。それが K の議論の延長線上にあることは間違いない。

1) MMK 1.3: na hi svabhāvo bhāvānām pratyayādiṣu vidyate / avidyamāne svabhāve parabhāvo na vidyate // (青目釈とアクトーパヤ注では第2偈であり、彼らはこれを他生に特化せず四句不生全体を説くと解釈する)。

2) Yoshimizu (forthcoming)。

3) 一郷 1991: 266–272 掲載のシノプシス参照。四句不生は離一多性論証を含む五つの無自性証明の一つ「金剛片の論理」と呼ばれる推論式に構成される (Keira 2004: 10, n. 32 参照)。なお、本稿で扱う『中観光明論』の内容理解は、佐藤晃氏 (早稲田大学) との講読にもとづくことを記しておきたい。

4) K が C を知っていた可能性は Keira 2004: 123, n. 196, 計良 2016: 74, n. 157 に指摘されている。

5) MMK 1.2: catvāraḥ pratyayā hetur ārambaṇam anantaram / tathavādhigateyaṃ ca pratyayo nāsti pañcamaḥ // (青目釈とアクトーパヤ注では第3偈)。

6) K は TSP (*Karmaphalasambandhaparīkṣā*) では刹那滅を前提とする異時の因果関係を擁護し、非仏教徒批判を行なっている (佐藤 2011 参照)。

7) MĀ D198b3–5, P218a8–218b4。

- 8) Bh は続けて二つの推論式を立てる。PP D49b4f., P59a7–59b1 (PsP I: 181, 4–9): na paramārthataḥ parebhyas tatpratyaeyebhya ādhyātmikāyatanañjanma paratvāt tadyathā ghaṭṭasya. atha vā na pare paramārthena vivakṣitāś caṣurādyādhyātmikāyatanañirvartakāḥ pratyaṣyā itī pratīyante paratvāt tadyathā tantvādayaḥ.
- 9) 「存在性」による刹那滅論証の否定的遍充を証明する認識根拠 (sādhavyaviparyayabādhakapramāṇa) があることを指すであろう。
- 10) 『大乘中観釈論』大正30, 137a1–16, PPT D88a2–89b4, P103a1–105a1. Kajiyama 1963: 51, n. 14, PPT D89b4–107a4, P105a1–124b3, PsP I: 180, 1, 185, 2f. 参照。

〈略号〉

MA Li Xuezhū, ed. 2015. “Madhyamakāvatāra-kārikā Chapter 6.” *Journal of Indian Philosophy* 43: 1–30. **MABh** *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti*. Ed. L. de La Vallée Poussin. St. Pétersbourg: Impr. de l’Académie impériale des sciences, 1907–1912. **MAI** *Madhyamakālamkāra*. 一郷正道 1985 『中観莊嚴論の研究』文栄堂. **MĀ** *Madhyamakāloka*. D3887, P5287. **MMK** *Mūlamadhyamakakārikā. Mūlamadhyamakakārikāḥ*. Ed. J. W. de Jong, Madras: Adyar Library and Research Centre, 1977; 叶少勇 2011 『《中论颂》与《佛护释》基于新发现梵文写本的文獻学研究』中西書局. **PP** *Prajñāpradīpa*. D3853, P5253. **PPT** *Prajñāpradīpaṭikā*. D3859, P5259. **PsP I** *In Clear Words. The Prasannapadā, Chapter One*. Vol. I. Ed. Anne MacDonald. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2015. **PsPL** *Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā*. Ed. L. de La Vallée Poussin. St. Pétersbourg: Commissionnaires de l’Académie impériale des sciences, 1903–1963. **TSP** *Tattvasaṃgrahapañjikā*. **Vimśikā** *Vijñaptimātratāsiddhi*. Ed. Sylvain Lévi. Paris: H. Champion, 1925.

〈参考文献〉

一郷正道 1991 「カマラシーラ著『中観の光』和訳研究 (1) 『京都産業大学論集』20(2): 229–279. **Kajiyama Yuichi**. 1963. “Bhāvaviveka’s *Prajñāpradīpaḥ* (I. Kapitel).” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens und Archiv für indische Philosophie* 7: 37–62. **Keira Ryusei**. 2004. *Mādhyamika and Epistemology: A Study of Kamalashīla’s Method for Proving the Voidness of all Dharmas*. *Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde* 59. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien. 計良龍成 2016 「『中観光明論』(*Madhyamakāloka*) 後主張第1章「聖典による一切法無自性の証明」の研究 (1)——和訳・註解・チベット語校訂テキスト——」*Acta Tibetica et Buddhica* 9: 1–121. 佐藤晃 2011 「刹那滅論を前提として因果関係は成立可能か——*Tattvasaṃgraha*(*pañjikā*) 520–522における刹那滅論擁護の論點——」『東洋の思想と宗教』28: 54–74. **Yoshimizu Chizuko** (forthcoming) “The Negation of Arising from Other in the *Mūlamadhyamakakārikā* and Beyond.” In *H. Krasser Memorial Volume*, ed. V. Eltschinger et al., Hamburg: Hamburg Buddhist Studies.

(2020年度科学研究費助成事業学術研究基金助成金20K00048による研究成果の一部)

〈キーワード〉 カマラシーラ, 『中観光明論』, 他生否定, 『中論』, 中観派

(筑波大学教授, Dr. phil.)